



Title	後部要素が状態や動作をあらわす四字漢語のアクセント融合問題 : 統語的關係と意味の視点から
Author(s)	陳, 曦
Citation	大阪大学言語文化学. 2017, 26, p. 3-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62204
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

後部要素が状態や動作をあらわす四字漢語のアクセント融合問題 —統語的關係と意味の視点から—*

陳 曦**

キーワード：漢語、アクセント、複合語

日语复合词在发音上有诸如 [ジ' コボ' ーエー] (自己防衛) 这种在词调(アクセント)上融合成一个单位的词, 也有诸如 [' オ' ーザボ' ーエー] (王座防衛) 这种没有融合成一个词调的词。

由两个要素组成的复合词在词调上是否融合, 其中一个决定性原因被认为是后部要素是否表示状态、动作。但是, 同为后部要素表示状态、动作的复合词, 其词调融合与否也并不一致, 而关于究竟是否融合成为一个词调的问题, 还有很多待解决的部分。

针对后部要素表示状态、动作的四字汉字词在词调上是否融合的问题, 本文试图寻找其中的原因。首先, 以 8 名日本首都圈出生长大的青年日语母语者作为调查对象, 进行了发音调查。

在发音调查的基础上, 从构词的角度对调查语进行了分类。第一步, 根据前部要素 (X) 是否为表示状态、动作的后部要素 (Y) 的“项”进行了分类。第二步, 当 X 与 Y 为“项关系”时, 根据 Y 是动作或是状态, 当 Y 为动作的时候, 根据 X 相对于 Y 的语法功能进行了分类; 而当 X 与 Y 为非“项关系”时, 根据 X 相对于 Y 的语义功能进行了分类。

根据发音调查的结果, 我们主要发现了以下 4 个倾向。

- ① X 和 Y 为“项关系”时的词调融合率低于 X 和 Y 为非“项关系”时。
- ② 对 X 相当于“ガ”、“ヲ”、“ニ”格的三者进行比较时, X 相当于“ガ”格的词的非融合率高。
- ③ Y 表示状态、动作, X 相当于“ヲ”格的词, 当 X 与 Y 同为动作性名词时, 非融合率高。
- ④ Y 表示状态、动作, X 相当于“ヲ”格的词, 动作 Y 中含有“变化”时, 非融合率高。

最后指出, (A) 前部要素与后部要素之间的语法关系是决定复合词在词调上是否融合的因素之一, 此外, (B) 要素是否表示动作、后部要素表示动作时是否包含“变化”局面这一语义也是其中一个因素。

* 后部要素表示状态、动作的四字汉字词的词调融合问题
—从语法关系和语义的角度来看— (陈曦 CHEN Xi)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

日本語の複合語¹には、[チュ^ˈーゴクミ^ˈヤゲ]² (中国土産) [ジ^ˈコボ^ˈーエー] (自己防衛) のようにアクセントが中高型の1単位に融合するものが多い。しかし、「中国南部」「王座防衛」は [チュ^ˈーゴク^ˈナ^ˈンプ] [オ^ˈーザボ^ˈーエー] のようにアクセントとして融合しない発音になる。

融合アクセントで発音する複合語が多数を占める中、非融合アクセントの発音が生じやすい前部・後部要素の関係として、「整理整頓」「小型軽量」などのような「並列構造」が多くの研究で指摘されている(窪菌 1995 など)。これ以外にも、二要素からなる複合語のアクセントの融合・非融合を決める一要因として、後部要素が状態・動作をあらわすか否かが挙げられる。窪菌(1995)によれば「格関係」の場合(「主語+動詞」、「主語+形容(動)詞」、「目的語+動詞」)、郡(2016)によれば「後半要素が状態・動作をあらわす場合」、アクセントとしてひとつに融合しないと述べている。また、窪菌(1995)は前述の構造を持つ語の中には、アクセントが融合するという例外(「自己防衛」「世代交代」など)と、両方の発音が可能な語(「被害妄想」)が存在するとしている。

アクセントが融合しない構造を持つ語の中に融合する語もある点について、窪菌(1995)は「(a) 構成要素の語種³、(b) 複合語全体の慣用度、(c) 発話スタイル、(d) 語順」などの緩和条件を挙げ、「自己防衛」「世代交代」などの「格関係」の場合におけるアクセントの融合について、主として慣用度の働きを指摘している。窪菌(1995)が挙げている慣用度などの4条件はアクセントが融合するかしないかを定める条件になりうるとしても、それだけで説明できない場合が後述のようにたくさんある。

このように、後部要素が状態や動作をあらわす複合語のアクセントの融合・非融合を左右する要因は何なのか。本稿では(ア)要素間の統語的關係、それから、(イ)要素が動作をあらわすかどうか、そして後部要素が動作をあらわすとき動作に〈変化〉の局面を含むかどうか、といった要素の意味がその一因であることを示す。

¹ 本稿の目的は、複数の要素からなる名詞相当形式がどのようなアクセントをとるかを、手始めに漢語2字+2字の組み合わせについて検討することである。したがって、「完全試合」のように辞典類に立項されていることが多く、要素どうしの結びつきが臨時的でないと思われる典型的な複合語だけでなく、「税率区分」のように辞典類に通常立項されず、複数の単語連続を臨時的に一語化したものとされる「臨時一語」(林 1982、石井 1993)も、そして「首都東京」のような「1成分となる句」(森岡 1994)も検討の対象に加える。これらをまとめて便宜的に「複合語」と呼ぶことにする。

² 角括弧内の表音カナに付けられている記号「^ˈ」が上昇、「^ˌ」が下降を表わす。この語の場合、特殊モーラでの上昇が前にずれた [チュ^ˈーゴクミ^ˈヤゲ] のような発音もよくあるが、本稿では便宜的にそれも含めて [チュ^ˈーゴクミ^ˈヤゲ] の形で示すことにする。

³ 窪菌(1995)は非融合アクセントで発音されると予測される、有標の意味構造を持つものが、融合アクセントで発音されるという例外の理由の1つとして、語種によって意味制約の適用を緩和することを挙げている。具体的には、「漢語よりも和語を含む複合語の方が、また和語よりも外来語を含む複合語の方が、同じ意味関係であっても CAR(複合語アクセント規則)の適用を受けやすい」という。

2 本稿の目的

複合語の後部要素が状態や動作をあらわす場合でも、アクセントが1つに融合するか否かがさまざまで、どちらになるかを定める要因が明らかになっていない部分がある。本研究は、後部要素が状態や動作をあらわす四字漢語に限定し、首都圏生育の日本語母語話者8名に対する発音調査をもとに、アクセントの融合・非融合を左右する要因は何かという視点から探ることを目的とする。

3 方法

3.1 調査語

問題となる四字漢語を最近の新聞・雑誌・広報紙などから収集した。ただし、前部要素と後部要素の元々のアクセント型が平板型+頭高型の場合(例:「修復困難」[シューフク+「コ」ンナン→シューフクコ「ンナン」など)、複合しているかどうかは表面形からわからないため、調査の対象外とする。前部・後部要素が単独で用いられる際のアクセント型は、『新明解日本語アクセント辞典 CD 付き』(2013)におけるアクセント表示に従った。前部・後部要素の品詞判断は『三省堂国語辞典 第七版』(2014)に従った⁴。

まず、集めた調査語候補を語構造の視点から分類した。最初に、後部要素(Y)を述語と見なしたときに前部要素(X)がその項であるか否かによって「(1) XとYが項関係」と「(2) XとYが項関係ではない」という2つに分類した⁵。本稿における「項関係」というのは、影山(1993)に倣い、「名詞が述語(動詞、動名詞、形容詞、形容名詞)に対して主語や目的語の文法的関係を結ぶ場合」を指す。

さらに、「(1) XとYが項関係」のとき、Yが動作か状態か、そしてYが動作の場合、Yに対するXの統語的役割によって分類を行った。また、「(2) XとYが項関係ではない」とき、小林(2004)に倣い、Yに対するXの意味的役割によって分類を行った⁶。

3.2 発音調査

調査協力者は首都圏生育で、18～30歳の日本語母語話者8名(男性5名、女性3名)である。協力者の負担や調査の所要時間など現実的なことを考慮し、調査語候補から分類項目ごとに語数を絞り、調査語を計448語選出した。調査語を「○○○○がテーマです。」か「○○○○が問題になっています。」の調査文に入れた。調査文を協力者にラン

⁴ 主に、辞典における後部要素(Y)の項目に「名・他サ」「名・自サ」「名・自他サ」と記載されているとき、Yを「動作」として、「名」「形動ダ」「名・形動ダ」などのときは、Yを「状態」として認定。

⁵ 「整理整頓」のような前部要素と後部要素が並列構造のものは本稿では扱わない。

⁶ (2) a～fが小林(2004)の分類(p.207の(8)～(13))。また、小林(2004)の用語では(2) bは〈時間・局面〉だが、本稿の中では、それとは異なる意味で「局面」という語が用いられるので、ここでは混同を避けるため〈時間関係〉という表現を使う。

(1) XとYが項関係

a. Yが動作

- a-1 Xがガ格: 景気悪化、人気沸騰…
- a-2 Xがヲ格: 兵器輸出、再発防止…
- a-3 Xがニ格: 党規違反、課題対応…
- a-4 Xがガ格 / ヲ格⁷: 国交回復、関係改善…
- a-5 Xがカラ格: 貧困脱出、会派離脱…
- a-6 Xが再帰代名詞: 自己啓発、自己管理…

b. Yが状態: 原因不明、経営不振…

(2) XとYが項関係ではない

- a. Xが〈場所〉: 街頭募金、現地調査…
- b. Xが〈時間関係〉: 一時休戦、早期解決…
- c. Xが〈程度・数量〉: 完全引退、過大徴収…
- d. Xが〈様態〉: 有効活用、相互信頼…
- e. Xが〈手段〉: 指紋確認、武力弾圧…
- f. Xが〈評価〉: 正式発表、不正受給…
- g. Xがその他: 国境論争、訂正放送…

ダムな順で提示し、1文につき合計2回発音してもらった。

4 結果と考察

4.1 全体的な傾向

語によって融合・非融合の発音回数が異なるわけだが、非融合の発音回数⁸(0~16)ごとの語数を図1に示す。図1の両端は融合(左)あるいは融合しない(右)傾向の強いものであり、中央は融合するかしないかというゆれが激しいものである。この図から、今回の調査語の中では、安定して融合しない語は比較的少なく、安定して融合する語が比較的多いことが分かる。

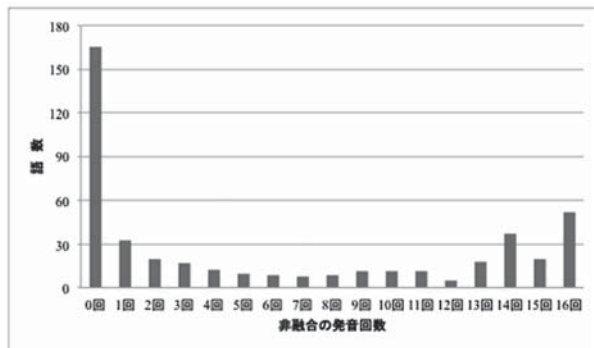


図1 調査語(全448語)の非融合の発音回数

⁷ Yが動詞として自他両用の場合、Xがガ、ヲ、ガ/ヲ格のどれに相当するのか判断が難しいときがある。そこで、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>)や検索エンジンで「XがY」と「XをY」を検索し、「XがY」のみがある場合、Xは「ガ」格に相当すると認定し、逆に「XをY」のみがある場合、Xは「ヲ」格に相当すると認定する。また、両方ある場合はXが「ガ/ヲ」格に相当すると認定する。そして、両方ともない場合、プラスの意味であるかどうかで分類し、プラスの意味のときはXは「ヲ」格、そうでないときは「ガ」格に相当すると認定する。ただし、「XがYされる」のような形の用例があっても、Xが「ガ」格に相当するとは認めない。

⁸ 協力者が融合か非融合か1つに決められず、「どちらでも」や「どちらか」と教えてくれたときもあるが、その場合は便宜上それぞれを1回の非融合の発音としてカウントしている。

4.2 前部要素と後部要素が項関係になっているものについて

表1は前部要素(X)と後部要素(Y)が項関係の場合の融合・非融合をあらわす表である。この表1から分かるように、XとYが項関係のものうち、a「Yが動作」より、b「Yが状態」の融合率が全体として低い傾向があるようだ。特にb「Yが状態」を「Yが『不足』以外」のものに限定すると、その融合率が29%という低い割合になっている。これは「Yが『不足』」のものには連濁という特別な事情がかかわっているため、例外扱いをするのが妥当だと思われる⁹。

ただし、a-5「Yが動作で、Xがカラ格」に相当するものの融合率が22%と非常に低いことが注目される。そして、a-6「Yが動作で、Xが再帰代名詞（「自己」「自分」など）」の融合率が92%と非常に高い割合になっている。

表1 前部要素(X)と後部要素(Y)が項関係の場合の融合・非融合

後部要素(Y)		語数	総発音回数	融合回数	%	非融合回数	%	語例
a Yが動作		290	4640	2628	57%	2012	43%	
	a-1 Xがガ格	48	768	248	32%	520	68%	景気悪化
	a-2 Xがヲ格	152	2432	1510	62%	922	38%	地名変更
	a-3 Xがニ格	48	768	526	68%	242	32%	課題対応
	(ガ、ヲ、ニ)	248	3968	2284	58%	1684	42%	
	a-4 Xがガ格/ヲ格	15	240	103	43%	137	57%	国交回復
	a-5 Xがカラ格	14	224	49	22%	175	78%	貧困脱出
	a-6 Xが再帰代名詞	13	208	192	92%	16	8%	自己管理
b Yが状態		40	640	252	39%	388	61%	
	Yが「不足」	6	96	96	100%	0	0%	睡眠不足
	Yが「不足」以外	34	544	156	29%	388	71%	正体不明

(3)

a-1 Xがガ格 融合率 32%

a-2 Xがヲ格 融合率 62%

a-3 Xがニ格 融合率 68%

4.2.1 前部要素(X)が「ガ」「ヲ」「ニ」格において「ガ」格の融合率が低い

(3)にあらためて示すように、後部要素(Y)が動作をあらわし、前部要素(X)が「ガ」「ヲ」「ニ」格に相当するものに限定して見ると、「ガ」格に相当するものの融合率が、「ヲ」格と「ニ」格に相当するものより低いことが分かる。

ここで、a-1「Yが動作をあらわし、Xがガ格にあたるもの」のYを述語と見なしたとき、そのほとんどは自動詞で、しかもその大部分が非対格自動詞（「景気悪化」、「人氣沸騰」など、今回の調査では48語中32語）である。

杉岡・小林(2001)¹⁰によれば、他動詞の主語と非能格動詞（「意図的な活動を表わす自動詞」）の主語、つまり「外項」は複合名詞の形成にあたって動詞と複合されない一方、

⁹ 調査協力者のいずれもがこの後部要素が「不足」の6語に対して、「不足」を「ぶそく」と連濁で発音し、しかも融合アクセントで発音した。

¹⁰ 影山太郎(編)(2001)『日英対照 動詞の意味と構文』の第9章「名詞+動詞型の複合語」(杉岡洋子・小林英樹)。

非対格動詞（「自然発生的な状態変化などを表わす自動詞」）の主語は、「他動詞の目的語と同じ内項で、意味役割としては動作の主体よりも変化の対象を表わす」ので、動詞との複合が可能である¹¹。となると、「景気悪化」のような、「ガ」格にあたるものと非対格自動詞の複合が「内項+動詞」になる。

一方、工藤（1995）が言うように「主体動作・客体変化動詞」（その全部が他動詞）について、「最も動詞らしい動詞」だとすれば、ある動詞（由来の名詞）を人が目にしたとき、意味をよく考えない限りその動詞を無意識的に他動詞として扱いやすく、そのため実際には「ガ格にあたる X+ 非対格自動詞の Y」の複合であるにもかかわらず、それを「ガ格にあたる X+ 他動詞の Y」、つまり「外項+動詞」の複合のように思いやすいのではないだろうか。そして、外項と動詞との結びつきは弱いという判断が働き、非融合アクセントで発音したのではないかという可能性が考えられる。

これに対し、a-2 と a-3、Y が動作をあらわし、X が「ヲ」格と「ニ」格に相当するものについては、影山（1993）も指摘しているように、X が「ヲ」格に相当する場合 X が他動詞の直接目的語、X が「ニ」格に相当する場合 X が補語を取る自動詞¹²の補語で、そのいずれも内項である。内項と動詞との結びつきは強いために、アクセントも融合しやすいのではないかと考えられる。

4.2.2 後部要素だけでなく「ヲ」格にあたる前部要素も動作性名詞の場合

前部要素が「ヲ」格にあたる四字漢語について、後部要素だけでなく前部要素も動作性名詞（サ変名詞）の場合におけるアクセントの融合・非融合を表2に示す。

表2 前部要素が「ヲ」格に相当するものの前部要素が動作性の名詞か否かと融合・非融合の関係

	前部要素 (X)	語数	総発音回数	融合回数	%	非融合回数	%	語例
	X がヲ格	152	2432	1510	62%	922	38%	
①	X が動作性の名詞以外	113	1808	1213	67%	595	33%	地名変更
②	X が動作性の名詞	39	624	297	48%	327	52%	移住促進

表2から分かるように、前部要素 X が「ヲ」格にあたるものの中で、① X が動作性の名詞であるものの非融合率（「移住促進」「行使容認」など）は、② X が動作性の名

¹¹ ただし、杉岡・小林（2001）では日本語の「動詞由来複合語」について考察するとき、「和語を中心的に扱い、漢語は参考程度にふれるに留める」と述べていて本稿の分析対象とは直接一致しない。

¹² 今回の調査語の中に、X がニ格に相当する場合、Y が自動詞用法のもの（29語、非融合回数151、非融合率33%）の他に、Y が他動詞用法のもの（19語、非融合回数91、非融合率30%）もあるが、両者の非融合率に顕著な差がないようだ。

詞以外のものより高い。

②のようなXが動作性名詞の場合は、Xが「ヲ」格に相当し、四字漢語全体が「XヲY(する)」という意味をあらわすにもかかわらず、XもYも動作性の名詞なため、意味をよく考えないと、並列構造のように捉えてしまいやすいという可能性が考えられる。「小型軽量」のような「XとY」あるいは「X・Y」という並列構造を持つ四字漢語は非融合アクセントで発音されることが知られている(窪菌 1995 など)。つまり、「移住促進」などは並列構造として捉えてしまう¹³ことがあるために非融合率が高くなる可能性が考えられる。

4.2.3 前部要素が「ヲ」格に相当する場合の後部要素の意味について

4.2.3.1 後部要素のアスペクト的性質

前部要素(X)と後部要素(Y)の項の関係が同じであってもアクセントは融合するものもあればしないものもある。その理由の可能性について、Yの動詞としてのアスペクト的性質に注目してみた。各分類の調査語数を考慮したうえで、ここではa-2「Yが動作で、Xがヲ格に相当するもの」に限定して考察する。さらに、XとYの元来のアクセントによる影響をできるだけ避けるため、XとYが平板型+平板型、そしてXもYも3モーラか4モーラのものに限定して観察する。

対象となる調査語は72語ある。そのうち、融合傾向の強いもの(非融合の発音回数が0~4の語)と非融合傾向の強いもの(非融合の発音回数が12~16の語)を表3に示す。

表3 前部要素が「ヲ」格に相当するもの(平板型+平板型)の融合・非融合傾向の強い調査語

	語数	調査語 (平板型+平板型)
融合 傾向強 (非融合回数 0~4)	35 (49%)	情報発信、栄養補給、政策転換、経営再建、情報交換、情報共有、政権運営、経営統合、経営改革、構造変更、損害賠償、出版企画、掲載依頼、景観形成、情報提供、感染予防、提案説明、財政運営、情報収集、合格発表、平和構築、情報伝達、健康志向、安全保障、環境保全、記録分析、気象観測、出産調整、法律改正、情報公開、家庭訪問、物価統制、家電販売、健康診断、記憶喪失
非融合 傾向強 (非融合回数 12~16)	23 (32%)	移住促進、販売促進、輸出促進、雇用継続、議席獲得、計画策定、再発防止、制裁緩和、犯罪防止、飲酒禁止、記録達成、国旗掲揚、指針改定、顧客獲得、負担軽減、消費抑制、移植実施、運転再開、辞表提出、交際開始、連載開始、収録開始、活動開始

表3の「非融合傾向強」の中にも、Yに3つのタイプが存在する。それは、(4)に示されるように、Vendlerのいう「到達」(a)と「達成」(b)、そして、「活動」だが漸次

¹³ このタイプのは話者内のゆれ(同一話者の1回目と2回目の発音が違う場合)が生じた回数も多く、さらに、「XをY」か「XとY」かで迷った、というような調査協力者のコメントもあった。

的变化をあらわすもの (c) である。

これは、表4の「時間幅」「展開」「明示的終点」といった意味成分を用いて分類したものである。

- (4)
- a. 移植実施、運転再開、議席獲得、記録達成、顧客獲得、制度開始、交際開始、連載開始、収録開始、活動開始 ……YがVendlerのいう到達
 - b. 計画策定、指針改定 ……YがVendlerのいう達成
 - c. 移住促進、販売促進、輸出促進、制裁緩和、負担軽減、消費抑制 ……Yが漸次的変化を表わす動詞

表4 語彙的アスペクトの分類と特徴
(影山 2009 の p.21 の【表1】より)

事象タイプ	時間幅	展開	明示的終点
状態	○	×	×
活動	○	○	×
達成	○	○	○
到達	×	○	○

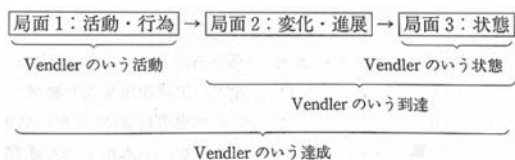


図2 Vendlerの4種類の語彙的アスペクトと行為連鎖の意味構造との対応
(影山 2009 の p.37 の (11) より)

影山 (2009) では、図2のように、Vendlerの4種類の語彙的アスペクトと行為連鎖の意味構造と対応付けている。その考え方にもとづけば、「到達」(a)と「達成」(b)には〈局面2: 変化・進展〉を含むことになる。また、通常の「活動」は〈局面2: 変化・進展〉を含まないと思われるが、(c)は漸次的変化をあらわすため、〈変化〉の局面を含むと考えられる。そうすると、三者に共通するのはYに〈変化〉の局面を含むことである。

一方、融合傾向の強いものの中には〈変化〉の局面を含むものも確かにあるが、その大部分がやはり「栄養補給」「政権運営」のような、後部要素 (Y) を述語と見なしたとき、Yに〈変化〉の局面を含まない、Vendlerのいう「活動」に大体相当するものとは言えよう。

このように、Yという動作によってXに変化が生じないときより、変化が生じるときの方が非融合アクセントになることが多いことが言えそうである。

Yを述語と見なしたとき、Yが「達成動詞」(b)の場合は時間幅があり、明示的終点がある。その終了時点ではなく、動作全体をひとつのまとまりとして眺める場合、静的に捉えられやすいが、その終了時点に焦点を当てた場合、〈変化〉の局面が鮮明に意識されるので動的に捉えられやすいのではないと思われる。そのためか、発音上も非融合アクセントというひとまとまりではない発音がされることが多くなるという可能性が考えられる。

Yが「到達動詞」(a)の場合は明示的終点があり、時間幅がないので動作としてその終点が抽出されやすく、〈変化〉の局面が鮮明に意識されると思われるため、動的に捉えられやすい結果、非融合アクセントで発音されやすいという可能性が考えられる。

Yが漸次的変化をあらわす動詞(c)は、明示的終点を持たないが、その動作が引き起こした変化が進展的・漸次的に進むと考えられる。つまり、そうした動作には決まった終点がないが、動作開始後のどの時点においても動作前の状態との差が見られる。そのため、「達成動詞」(b)と類似し、捉え方によって動的にも静的にも捉えられると思われる。

それに対し、Yを述語と見なしたとき、YがVendlerのいう「活動」の場合、明示的終点を持たず、動作Yに〈変化〉の局面を含まないため、事象把握の際、動的に捉えにくく、動作全体を静的にひとまとまりとして捉えやすく、その結果発音上も融合アクセントというひとまとまりで発音されることが多いのではないかという可能性が考えられる。

4.2.3.2 国立国語研究所(2004)から見る後部要素(Y)の意味

『分類語彙表(増補改訂版)』(国立国語研究所2004)を使って、前部要素(X)が「ヲ」格に相当する場合の後部要素(Y)を分類すると、表5のようなになる。国立国語研究所(2004)における「1体の類」の下位分類の名称が(5)に示される¹⁴。

表5から、Yが「1.1のみ」より、「1.3のみ」の方が融合率が高いことが分かる。つまり、Yが「抽象的關係」をあらわすものより、Yが「人間活動—精神および行為」をあらわすものの方が融合アクセントで発音することが多いということになる。

表5 国立国語研究所(2004)から見る後部要素(Y)の意味

	語数	総発音回数	融合回数	%	非融合回数	%	語例
1.1のみ	38	608	218	36%	390	64%	設備増強
1.1&1.3	32	512	341	67%	171	33%	感染予防
1.1&1.5	1	16	1	6%	15	94%	利益還元
1.3のみ	79	1264	923	73%	341	27%	土地販売
1.3&1.5	1	16	11	69%	5	31%	人材育成
1.5のみ	1	16	16	100%	0	0%	大気汚染

(5)

- 1.1 抽象的關係
- 1.2 人間活動の主体
- 1.3 人間活動—精神および行為
- 1.4 生産物および用具
- 1.5 自然物および自然現象

¹⁴ 国立国語研究所(2004)によると、1けた目の「類」は最初に語を大きく四類(体の類、用の類、相の類、その他の類)に分けたもので、「体の類」は「名称を表す語で、名詞の類」。2けた目は「部門」で、「部門」とは類の中に大きな意味的まとまりとして分けたものだという。

「1.3 人間活動—精神および行為」に属するものは、「人間の精神過程や行為そのものに表現の重点があつて、結果の状態は意味に含まない」(西尾 1988) ため、後部要素が「1.3 のみ」に属する場合、四字漢語のあらわす動作によってヲ格にあたる X に変化が生じることが少ないと考えられる。これもまた、動作によって X に変化が生じるものが非融合アクセントで発音されることが比較的多いという傾向を裏付けているとも言えよう。

4.2.3.3 自他両用の動詞について

表 6 は前部要素 (X) が「ヲ」格にあたる場合、Y が動詞として他動詞専用か自他両用かを分けたときの融合・非融合をあらわす表である。「X がガ格 / ヲ格」にあたるもの、X が「ヲ」格にあたるで見なすことができるため、ここでは、「X がガ格 / ヲ格」にあたるものを「X がヲ格、Y が自他両用」のものとして扱う。表 6 から、X が「ヲ」格に相当する場合、Y が動詞として自他両用のものが、Y が他動詞専用のものより、非融合率が高いという傾向が窺える。

自他両用のサ変名詞が、「回ると回す」「暖まると暖める」のような、対応する自動詞(非対格自動詞)と他動詞のペアのものと類似すると思われる。

表 6 前部要素 (X) がヲ格にあたる場合の融合・非融合

(Y が動詞として他動詞専用か自他両用か)

前部要素 (X)	後部要素 (Y)	語数	総発音回数	融合回数	%	非融合回数	%	語例
X がヲ格	Y が他動詞専用	129	2064	1312	64%	752	36%	王位継承
	Y が自他両用	38 ¹⁵	608	301	50%	307	50%	契約更新、 国交回復

早津 (1989) は、対応する自動詞を持つ有対他動詞と対応する自動詞をもたない無対他動詞の違いについて、「対象の変化の含意」という点において、前者は「含意するものが多い」のに対し、後者は「含意しないものが多い」としている。更に、「有対他動詞には働きかけの結果の状態に注目する動詞が多く、無対他動詞には働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い」としている。

その考え方にもとづけば、Y が他動詞専用の場合、〈変化〉の局面を含まないことが多いと考えられるため、事象把握の際、その動作を静的に捉えることが多い結果、融合アクセントで発音することが多いと考えられる。一方、Y が自他両用の場合、Y によ

¹⁵ 38 語の「Y が自他両用」のうち、「X がヲ格、Y が自他両用」に分類している語が 23 語、「X がガ格 / ヲ格」に分類している語が 15 語。

て変化が生じること多いと考えられるため、事象把握の際、〈変化〉の局面ではなく動作全体を把握する場合は静的に捉えやすいため融合アクセントで発音されやすいのに対し、〈変化〉の局面に注目した場合は動的に捉えやすいため非融合アクセントで発音されやすい結果、Yが他動詞専用のものより非融合率が高いのではないかと思われる。

4.3 前部要素と後部要素が項関係ではないのものについて

表7から、前部要素(X)と後部要素(Y)が項関係ではないものの融合率が85%と比較的高いことが分かる。また、XとYが項関係ではないもののうち、Xが〈時間関係〉をあらわすものの非融合率(39%)は、Xが〈時間関係〉以外をあらわすもの(9%)より高い傾向があるようである。

表7 前部要素と後部要素が項関係ではないものの融合・非融合

前部要素(X)	語数	総発音回数	融合回数	%	非融合回数	%	語例
	118	1888	1612	85%	276	15%	
Xが〈時間関係〉	22	352	215	61%	137	39%	一時休戦
Xが〈時間関係〉以外	96	1536	1397	91%	139	9%	有効活用

(6) 一時休戦、順次発売、順次実施、随時参加、早期解決、新規参入、無事退院、一部緩和、一部改正、即時撤退

XとYが項関係ではないものの中で非融合傾向が比較的強い語(非融合の発音回数が12~16の語)を(6)に示す。その中でも、「一時休戦」「早期解決」などのような、Xが〈時間関係〉をあらわすものが多いことが注目される。

5 まとめ

本稿では「後部要素が状態や動作をあらわす四字漢語」について、首都圏生育の日本語母語話者8名に対する発音調査をもとに、アクセントの融合・非融合を左右する要因は何なのかを探った。その結果、以下の傾向があることが分かった。

①前部要素(X)と後部要素(Y)が項関係の場合の融合率が、XとYが項関係ではない場合より低い。

佐藤(1989)は〈名詞+動詞連用形〉の複合語において、「副詞的連用修飾関係では連濁を起こし易く」(連用修飾:角狩り、土砂降り)、「格関係では連濁を起こしにくい」(目的格:草刈り、主格:雨降り)とし、さらにその理由は「連用修飾関係は、格関係

よりも緊密性が強い」としている。

その考え方にもとづけば、「XとYが項関係」（佐藤（1989）でいう「格関係」に大体相当）のときより、「XとYが項関係ではない」（佐藤（1989）でいう「連用修飾関係」に大体相当）とき、前部と後部がより緊密で、結びつきが強いことになる。そのため、「XとYが項関係ではない」とき、四字漢語が1単位であるという意識がより強い結果、アクセント上も1単位に融合する発音になることが比較的多いと思われる。

また、川上（1995）では、「文法」と「アクセント」の関係の観点から、前部要素が名詞、後部要素が動詞の連用形で二音節である、複合語のアクセントを考察した結果、「前部成素の文法的機能の差に依り、その複合語のアクセントに起伏式と平板式の差が生じる訳で、文法がアクセントを支配していると云える。」と述べている。具体的には、目的格複合語（魚釣り [サ カナ ツリ]）は起伏式、副詞格複合語（瓦葺き [カ ワラブキ]）は平板式になるという。それを今回の結果と照合すると、前・後部要素の統語的關係の違い（XとYが項関係であるか否か）が、前・後部要素の結びつきの強さに影響する形で複合語のアクセントを左右していることが和語・漢語に共通して見られると言えよう。

②後部要素（Y）が動作をあらわし、前部要素（X）が「ガ」「ヲ」「ニ」格に相当するものに限定して見ると、「ガ」格に相当するものの融合率が低い。これは「ガ格にあたるX+非対格自動詞のY」の複合を「ガ格にあたるX+他動詞のY」、つまり「外項+動詞」の複合のように思ってしまうやすく、その結果外項と動詞との結びつきは弱いという判断が働き、非融合アクセントで発音したのではないかという可能性が考えられる。傾向①と同じように、傾向②も前・後部要素の統語的關係の違い（Xが「ガ」「ヲ」「ニ」格のどれに相当するか）が、要素間の結びつきの強さの判断に影響する形で、複合語のアクセントを左右しているようである。

③「Yが動作をあらわし、Xがヲ格にあたる」場合、前部要素も後部要素も動作性名詞のときの非融合率が高い。これは前部も後部も動作性名詞のとき、非融合アクセントで発音される並列構造として捉えてしまうことがあるために非融合率が高くなる可能性が考えられる。

④「Yが動作をあらわし、Xがヲ格にあたる」場合、Yという動作によってXに変化が生じるとき、非融合率が高い。

NHK放送文化研究所（2016）は、1つの同じ語がアクセント上1単位形と2単位形の「両形が併存しつつ微妙な使い分けがあることもあり、例えば2単位形のほうが相対的に『動的ニュアンス』を、1単位のほうが『静的ニュアンス』を帯びることもある。」としている。NHK（2016）の指摘は解説文の筆者の直感にもとづくものであろうが、言語学的に分析すると、それは実は動作に〈変化〉の局面を含むか否かは、事象把握の

際、動的か静的かという話者の捉え方に影響する形で、アクセントとして1単位に融合するかどうかを左右していることを言っているのではないかと思われる。具体的には、Yという動作に〈変化〉の局面を含まないとき、事象把握の際、その動作を静的に捉えること多い結果、融合アクセントで発音することが多いと考えられる。一方、「同じ対象について構成要素に注目することも全体を把握することもできるという認知能力に基づき、1つの対象に対して異なる表現をすることができる。」(榎山 2010)の言うように、Yという動作に〈変化〉の局面を含むとき、同じ動作Yについて〈変化〉の局面ではなく動作全体を把握する場合は静的に捉えやすいため融合アクセントで発音されやすいのに対し、〈変化〉の局面に注目した場合は動的に捉えやすいため非融合アクセントで発音されやすい結果、〈変化〉の局面を含まないときより非融合率が高いのではないかと思われる。

以上のように、後部要素が状態や動作をあらわす複合語のアクセントの融合・非融合を決める要因として、(ア)要素間の統語的關係があることを提示したうえで、これは統語的關係の違いが、要素間の結びつきの強さに影響する形で複合語のアクセントを左右するという考え方を示した。具体的には、XとYが項関係のとき、さらにXが「ガ」格に相当する場合(「人気沸騰」など)、要素間の結びつきが比較的弱い(または弱いと思ってしまうやすい)ため、非融合アクセントになることが比較的多い。

また、それだけではなく、(イ)要素が動作をあらわすかどうか、そして後部要素が動作をあらわすとき動作に〈変化〉の局面を含むかどうか、といった要素の意味もその一因であることを示した。具体的に、並列構造として捉えてしまいやすいため、XもYも動作性をあらわすとき(「移住促進」など)、非融合アクセントになることが比較的多い。そして、Yという動作に〈変化〉の局面を含むとき(「指針改定」など)、事象把握の際、静的だけではなく動的に捉えることもあるため、アクセントとして1単位に融合しないことが比較的多い。

XとYが項関係で「Yが状態」の場合、また、a-5「Yが動作で、Xがカラ格」に相当する場合、a-6「Yが動作で、Xが再帰代名詞(「自己」「自分」など)」などについて、今後詳しく観察していく予定である。また、融合するかしないかの条件について、今回の調査ではすべて「地名変更が」のように調査語の直後に「が」という格助詞をつけた形で行ったため、四字漢語の置かれる文脈の違いによる影響などは検討できていない。だが、今回考察してきた要因以外の文法的要因などが関わる可能性も十分あり得ると考えられるので、今後はこのような点を考慮し、調査語1つにつき複数の調査文を作成するような調査を行う予定である。

謝辞 調査にご協力くださった方々、ならびに本論文について有益なご意見をいただいた2名の査読者に深謝申し上げます。

引用文献

- 秋永一枝（編）（2013）『新明解日本語アクセント辞典 CD 付き』三省堂。
- 石井正彦（1993）「臨時一語と文章の凝縮」『国語学』173、pp.103-91。
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房。
- 影山太郎（編）（2001）『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店。
- 影山太郎（編）（2009）『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店。
- 川上夔（1995）『日本語アクセント論集』汲古書院。
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房。
- 窪菌晴夫（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版。
- 見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大（編）（2014）『三省堂国語辞典 第七版』三省堂。
- 郡史郎（2016）「アクセントの複合形態と長い複合語のアクセント—『携帯電話電源オフ車両』などの説明原理についての覚え書き—」『音声言語 VII』pp.31-48、近畿音声言語研究会。
- 国立国語研究所（編）（2004）『分類語彙表（増補改訂版）』大日本図書株式会社。
- 小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房。
- 佐藤大和（1989）「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『日本語の音声・音韻(上)』、pp.233-265、明治書院。
- 西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』明治書院。
- 林四郎（1982）「臨時一語の構造」『国語学』131、pp.15-26、明治書院。
- 早津恵美子（1989）「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的特徴を中心に—」『言語研究』95、pp.231-256。
- 榎山洋介（2010）『認知言語学入門』研究社。
- 森岡健二（1994）『日本文法体系論』明治書院。
- NHK 放送文化研究所（編）（2016）『NHK 日本語発音アクセント新辞典』NHK 出版。